奈良絵本『張良』解題・翻刻

柳沢昌紀

解題

一　『張良』の絵本と絵巻

本学図書館に、『張良』という表題の奈良絵本がある。特大縦型で、近世前期の寛文・延宝頃に製作されたのではないかと思われるものである。袋綴一冊で、題簽に「張良 下」と記されているが、もと二冊であったものを合冊し、その際下巻の表紙を使ったものと思われ、欠本ではなく完本である。

『張良』と言えば、謡曲や幸若舞曲がよく知られている。それらの『張良』は、いずれも『史記』留侯世家や『漢書』張良伝、さらには『蒙求』等にも記された、いわゆる子房取履譚が大もととなっている。子房とは漢の高祖に仕えた張良の字で、取履譚とは、張良が下邳の橋で出会った一人の老人から川に落とした沓を取ってこい

と命じられ、拾ってきたところ、五日後にまたここに来なさいと言われ、何度か橋に通った後、太公望の兵法を記した一巻の書物を賜ったという話である。

ところが、本学図書館の絵本の内容は、謡曲でも幸若舞曲でもない。上巻に子房取履譚は出てくるが、その後に『史記』項羽本紀に記される内容が書かれている。項羽と沛公（後に漢の高祖となる劉邦）が蜂起し、咸陽宮に攻め入って秦を滅ぼす話、さらに有名な鴻門の会の話、そして四面楚歌の話がさらりと付け加えられていて、項羽が自刃する場面が描かれている。つまり中京大本の内容は、張良の一代記とも言うべき物語となっており、御伽草子と位置づけうるものなのである。

御伽草子『張良』について最初に言及したのは、宮田和美氏であろう。[1] 宮田氏は、「管見に入ったものは二種であるが、ともに『史記』の記事を部分的に抜き出して繋ぎ合わせ、一つの物語として再構成したものと考えられる」とする。しかしながらどこに所蔵される本を見たのかについては、記載がない。

御伽草子『張良』を次に取り上げたのは、黒田彰氏である。[2]

管見に入った御伽草子『張良』は、三本ある。大谷女子大学本は、近世初期写、奈良絵本二冊。上冊に六図、下冊に五図の絵を載せる。今一つは、ニューヨーク公立図書館スペンサー・コレクション蔵本で、『スペンサー・コレクション蔵日本絵入本及絵本目録』（弘文荘、昭和53年）に、「寛文頃写　奈良絵本　二巻」とある。上巻に六図、下巻に六図の絵を載せる。スペンサー本と大谷女子大学本とは、別系統と認められる。

黒田氏は、さらにもう一つの絵巻にも言及しているが、「本文は舞曲『張良』で、大頭流系と思しい」とあるから、御伽草子ではないようである。そして大谷女子大学本、すなわち現在の大阪大谷大学図書館蔵本とスペンサー本のそれぞれ一部を引用している。

スペンサー本については、その後松田存氏が全文の翻刻を行い、併せて二箇所の図版が掲載されている。[3] 図版の一つは、ちょうど張良が沓を拾う場面の挿絵であるが、張良は大蛇の首に跨っているようである。前述の宮田氏は「一本には、黄石公の沓を持つ張良が大蛇の首に跨がっている絵が見られる」と記すので、[4] スペンサー本を見たのかもしれない。

次に、筆者が現在把握している『張良』の絵本と絵巻の諸本を示すことにする。

『張良』諸本一覧　　● 未見

御伽草子

［甲本］

●ニューヨーク公立図書館スペンサーコレクション蔵大型絵巻　二軸

＊「二松学舎大学東洋学研究所集刊」二三に翻刻と図版掲載あり

［乙本］

学習院大学日本語日本文学科研究室蔵大型絵巻　二軸（整理書名『張良物語』、七二一・二／五〇〇二）

＊『弘文荘待賈古書目』三〇・三六・五〇に図版掲載あり

國學院大學図書館蔵大型絵巻　二軸（整理書名『張良物語絵巻』、貴一七三九、一七四〇）

中京大学図書館蔵特大縦型絵本　袋綴合一冊（貴一四八）

大阪大谷大学図書館蔵特大縦型絵本　袋綴二冊（K七二一・二／C）

●京都大学附属図書館蔵小絵巻　二軸（整理書名『漢楚軍談画巻物』、〇八—四四／カ／〇二貴別）

幸若舞曲

●『古典籍下見展観大入札会目録』（昭六二）掲載絵巻　一軸

謡曲

●大分市美術館蔵大型絵巻　一軸

＊『思文閣古書資料目録・善本特集』九に図版掲載あり

少なくとも御伽草子が六本、幸若舞曲と謡曲がそれぞれ一本ずつ伝存しているようである。ほかにも個人蔵の絵巻一軸が存在するようだが、[5] 筆者は未確認である。さらに某古書肆が、御伽草子の甲本と思われる絵巻二軸を所蔵するようである。

ちなみに幸若舞曲の一本の現所蔵者はわからない。昭和六二年の東京古典会『古典籍下見展観大入札会目録』に、子房取履譚の挿絵と詞書き三行分の図版が掲載されている。[6] また謡曲の一本は、『思文閣古書資料目録・善本特集』九に掲載されているが、[7] 大分市美術館の所蔵に帰した旨、石川透氏からご教示いただいた。巻頭と巻末に一紙分の詞書きが記されるだけで、殆どが物語を絵解きした部分よりなっているとのことである。

二　御伽草子『張良』の諸本

さて、問題は御伽草子の六本である。黒田氏のご指摘のとおり、スペンサー本と大阪大谷大本は別系統の本文を有する。前掲一覧では、仮に前者を甲本、後者を乙本とした。中京大本は、大阪大谷大本とほぼ同じ本文を有

する。漢字と仮名の違いや読み仮名が付される箇所の違いはあるが、同一の本文を底本として書写されたものではないかと思われる。さらに言えば、学習院大学日本語日本文学科研究室蔵絵巻、國學院大學図書館蔵絵巻、京都大学附属図書館蔵絵巻も、殆ど同一の本文を持つことが判明した。[8]

甲本と乙本とを比べてみると、甲本には乙本に見られない内容が記されている。甲本、すなわちスペンサー本には冒頭に、秦の始皇帝が周を滅ぼして中国統一を果たし、咸陽宮を築くまでの話がある。また子房取履譚の後に、始皇帝が「たいさん」という山に臨幸し、海上の「ほうらい」という仙人の住む島に渡ろうとし、たたりをなすかもしれない龍神を射殺そうとした後、崩御する記事がある。四面楚歌の話も乙本より詳しく、さらに項羽が死に、漢の高祖が即位した後、后・呂后腹の王子を捨てて妾腹の子を立太子しようとするも、張良の知謀でそれを断念させる話などが記されている。

甲本は全体に張良の物語として読んだ時にまとまりがやや弱く、乙本より古態を示しているように感じられる。それに対して乙本は、近世に入ってから整えられた本文ではないかという印象を受ける。反町茂雄氏は、『弘文荘待賈古書目（弘文荘善本目録）』五〇で学習院大現蔵本について、「ストーリーが盛り沢山で、仮名草子風の読み物である」と記す。[9] 詞書き本文冒頭部は、確かに儒教臭く、近世前期に書かれた仮名草子に通ずるものが認められる。

乙本に分類できる五本のうち、現在までに実見に及んだのは四本であるが、四本はいずれも大型絵巻もしくは特大縦型絵本である。以下に四本の略解題を記しておきたい。

中京大学図書館蔵

特大縦型袋綴合一冊。二巻。〔江戸前期〕写。

表紙　紺地金泥表紙なるも全体に表皮剝落。二九・八×二二・一糎。

題簽　左肩金色題簽「張良ド」。

見返し　本文共紙、金泥の下絵あり。

料紙　斐紙、金泥の下絵および藍色の刷り模様あり。

内題　なし。

界　なし。

字面高さ　二二・八糎（上巻本文初行）。

詞書き　毎半葉一〇行、行一八字内外、漢字交じり平仮名文、句読点なし、読仮名あり。

挿絵　上巻六面五図、下巻七面五図。

墨付丁数　上巻一八丁、下巻一九丁。

印記　なし。

備考　表紙裏に大福帳等と思われる反古紙あり。若干水染みあり。

大阪大谷大学図書館蔵

特大縦型袋綴二冊。二巻。〔江戸前期〕写。

表紙　紺地金泥表紙なるも全体に表皮剝落。二九・九×二二・五糎。

題簽　剝落。
見返し　金箔押し。
料紙　斐紙（中京大本よりやや厚手）、金泥の下絵あり。
内題　なし。
界　なし。
字面高さ　二二・九糎（上巻本文初行）。
詞書き　毎半葉一〇行、行一八字内外、漢字交じり平仮名文、句読点なし、読仮名あり。
挿絵　上巻七面六図、下巻七面五図。
墨付丁数　上巻一九丁、下巻二〇丁。ほかに上下巻とも冒頭に遊紙一葉ずつあり。
印記　「鋏心斎文庫」（芦澤新二）。
備考　表紙裏に大福帳等と思われる反古紙あり。若干手ずれ汚れあり。友山文庫（中野荘二）旧蔵。

学習院大学日本語日本文学科研究室蔵

大型絵巻二軸。二巻。〔江戸前期〕写。
表紙　二重蔓牡丹唐草文様金襴表紙、三三・〇×二九・六糎。
題簽　左肩に「張良物語　上（下）」、金の切箔散らし。
見返し　斐紙に金銀切箔散らし。
料紙　斐紙、金泥の下絵あり。裏は別紙を貼り合わせ（挿絵には別紙のないものもあり）、雲母引きして粗く金

の切箔を散らす。一紙幅四八糎前後が基本で、詞書き箇所に二四糎前後のもの、その他が混ざる。また挿絵箇所に九五糎前後のものも使われている。上巻二七紙継ぎ、下巻二五紙継ぎ。

内題　なし。

界　なし。

字面高さ　二七・〇糎（上巻本文初行）。

詞書き　一紙幅四八糎前後の場合、一九～二〇行、上巻三五八行、下巻三六〇行、行一四字内外、漢字交じり平仮名文、句読点なし、読仮名あり。

挿絵　上巻六図、下巻五図、全て一紙に描かれている。

全長　上巻一二四八糎程度、下巻一二五八糎程度（いずれも除見返し）。

印記　「学習院図書」（桜花の図柄）。

備考　『弘文荘待賈古書目』三〇・三六・五〇に上巻第三図が掲載されている。

國學院大學図書館蔵

大型絵巻二軸。二巻。〔江戸前期〕写。

表紙　灰緑色布地に金糸で市松文様を織り出す、上巻三三・〇×二八・三糎、下巻三三・二×二七・九糎、押え竹あり。

題簽　なし。

見返し　金箔押し。

料紙　斐紙、金泥の下絵あり。裏は別紙を貼り合わせ、雲母引きして粗く金の切箔を散らす。一紙幅五〇糎前後が基本で、詞書き箇所に二六糎前後のもの、三五糎前後のもの、その他が混ざる。挿絵箇所は全て五〇糎強のものを用い、二枚貼り継いで一図の場合もあり。上巻二六紙継ぎ、下巻二八紙継ぎ。

内題　なし。

界　なし。

字面高さ　二七・一糎（上巻本文初行）。

詞書き　一紙幅五〇糎前後の場合、一九～二〇行、上巻三〇〇行、下巻三〇八行、行一七字内外、漢字交じり平仮名文、句読点なし、読仮名あり。

挿絵　上巻八紙六図、下巻八紙五図。

全長　上巻一一九二糎程度、下巻一一八〇糎程度（いずれも除見返し）。

印記　なし。

備考　針目安あり。若干虫損あり。

詞書き本文をゆがみなく記すために針や刃物等で開けられた穴、すなわち高田信敬氏が言うところの針目安[10]については、伊藤慎吾氏の詳細な調査報告がある[11]。伊藤氏は、次のように記す。

製作の現場から見た場合、江戸前期、商品としての奈良絵本は、絵巻・特大本（袋綴・下絵つき鳥の子紙・いわゆる土佐絵風・能書）を主として作る工房と、いわゆる量産型の横型本（中略）・半紙本を主として作る工房とが別々に存在したであろう。針目安は後者に認められるものである。

この説に従えば、乙本四本はいずれも前者の工房で作られたものということになる。いわゆる豪華本の絵巻・絵本であり、公家や大名といった人々の注文に応じて製作されたものと思われる。そうした近世期の上層階級の人々の嗜好に合わせて整えられた本文が、乙本だったのではないかと想像される。

しかしながら、國學院大本の詞書き部分には針目安がある。量産型の横型本・半紙本ではないのに、針目安が存在するのである。針目安の有無については、今後『張良』以外の絵巻を見る際にも確認する必要があろう。それと同時に、乙本四本が同じ工房で作られたという点についても、もう少し検討の必要があるようである。また、乙本のうち未見の京大本が小絵巻であることの意味については、いずれ閲覧可能となった暁に、実見の上、改めて考えてみたい。

三　詞書きの筆跡

ところで江戸前期写の奈良絵本・絵巻の類については、近年、石川透氏が精力的に調査し、その詞書き本文の筆跡について分類整理を続行中である。石川氏によれば、この時期には、別本『落窪の草子』のうち実践女子大学図書館蔵奈良絵本『おちくぼ』春に見られる落窪春の筆跡、埼玉県立歴史と民俗の博物館に七軸、スペンサーコレクションに二軸、国立歴史民俗博物館に三軸がある『太平記』絵巻に認められる太平記絵巻の筆跡、国文学研究資料館蔵『羅生門物語』絵巻やスペンサーコレクションの『大職冠』絵巻等、いくつかの絵巻の巻末に署名が見える朝倉重賢の筆跡、そして大阪大谷大学図書館蔵『俵藤太』絵巻や海の見える杜美術館蔵『義経都話』絵巻等に認められる仮名草子作家・浅井了意の筆跡などがあるとのことである。(12)

ちなみに『張良』諸本のうち、前述の幸若舞曲の絵巻には朝倉重賢の署名が存するとのこと。[13] また石川透氏は、御伽草子甲本のスペンサー本も朝倉重賢の筆跡、乙本の國學院大本を太平記絵巻の筆跡と判定している。[14]

それでは、同じく乙本である学習院大本、大阪大谷大本、そして中京大本は、それぞれどの筆跡なのであろうか。次頁と次々頁に、國學院大本を含む、乙本四本の詞書き本文冒頭部を並べて掲出した。

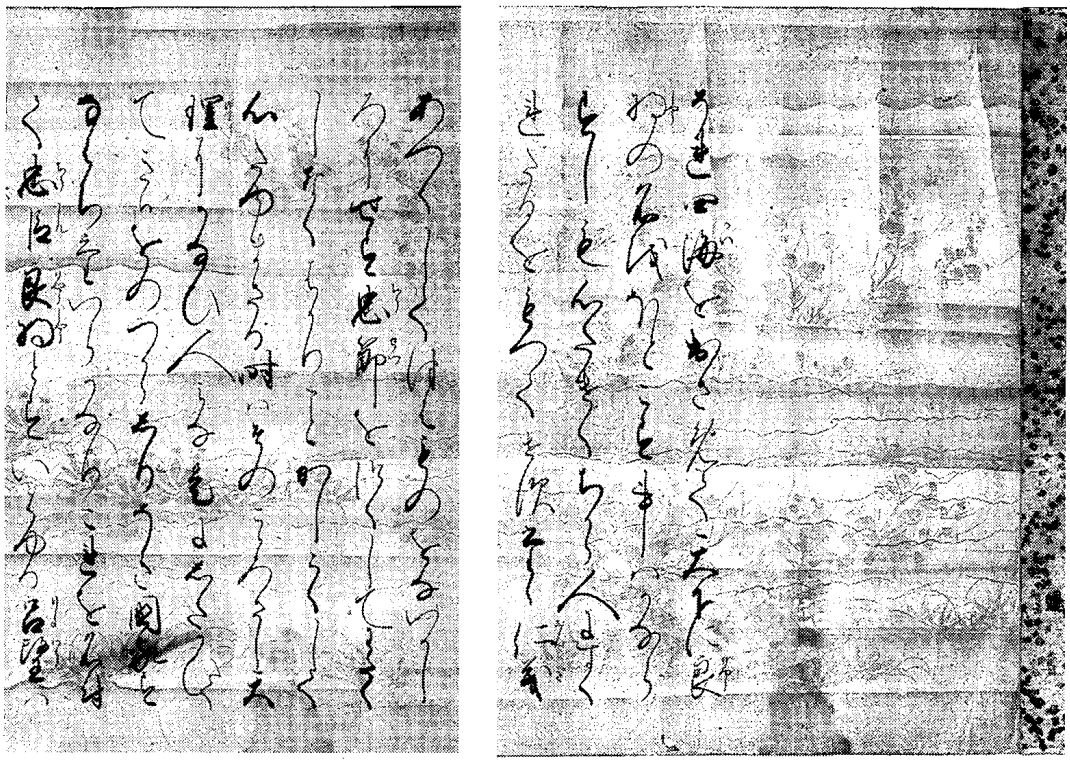
まず学習院大本だが、結論から言えば、國學院大本同様太平記絵巻の筆跡と思われる。石川氏によれば、太平記絵巻の筆跡の特徴は「平仮名「あ」が縦にへこむこと、「を」の突き抜け方、「い」が縦に短くなること」等だそうであるが、[15] それらが埼玉県立歴史と民俗の博物館蔵『太平記』絵巻とよく似ている。[16] この筆跡が見られるのは、殆どが大型絵巻物のようである。

大阪大谷大本と中京大本は、いずれも特大縦型絵本である。中京大本は、前述のとおり上下巻合綴されているが、この両本は表紙の形状や寸法、詞書き本文の字面高さ、料紙の下絵等、そっくりなのである。両本の詞書きの筆跡は、いずれも落窪春の筆跡と思われる。石川氏は、落窪春の筆跡を、「「を」「て」「ひ」を伸びやかに書く等、かなりくせのある字」だと述べている。[17] 大阪大谷大本はそのあたりの特徴がやや弱い感じもするが、書写時期の違いなどによるものかと思われ、同筆と判断して良かろう。

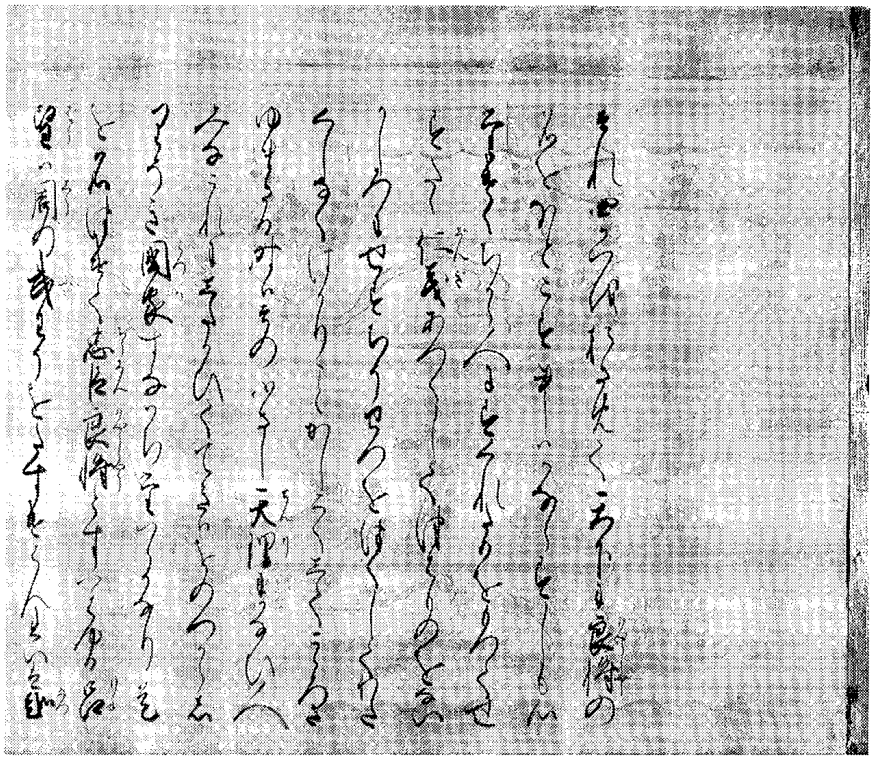
本学図書館は、この落窪春の筆跡の絵本をほかにもいくつか所蔵している。特大縦型絵本の『竹取物語』（貴三〇）一冊、半紙縦型絵本の『源氏物語』澪標（貴一七二）・松風（貴七三）・朝顔（貴七四）・少女（貴一七一）・行幸（貴七五）・藤裏葉（貴一七三）各一帖がそれにあたる。この筆跡は絵巻よりも絵本に多く認められ、特大縦型だけでなく、半紙縦型にも結構見られるようである。

以上の如く、御伽草子『張良』乙本の詞書き本文は、大型絵巻である國學院大本と学習院大本が太平記絵巻の

詞書き本文冒頭



学習院大本



國學院大本

中京大本

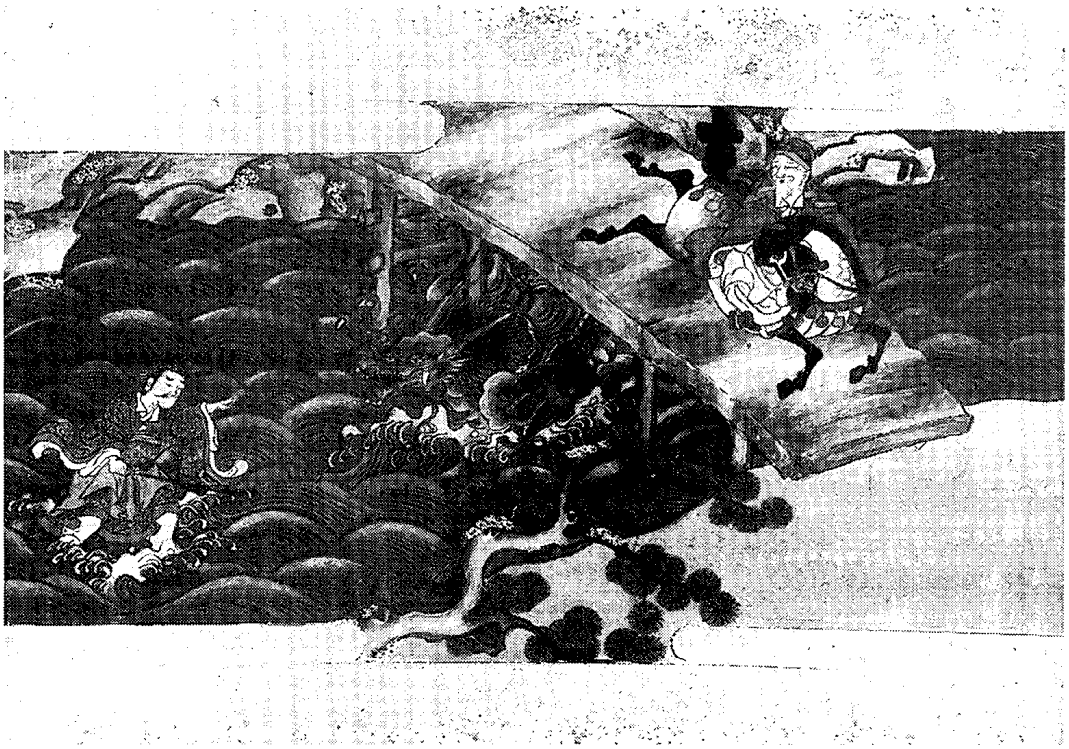
大阪大谷大本

筆跡、特大縦型絵本である大阪大谷大本と中京大本が落窪春の筆跡であることがわかった。では挿絵の描かれ方や構図は、どうであろうか。

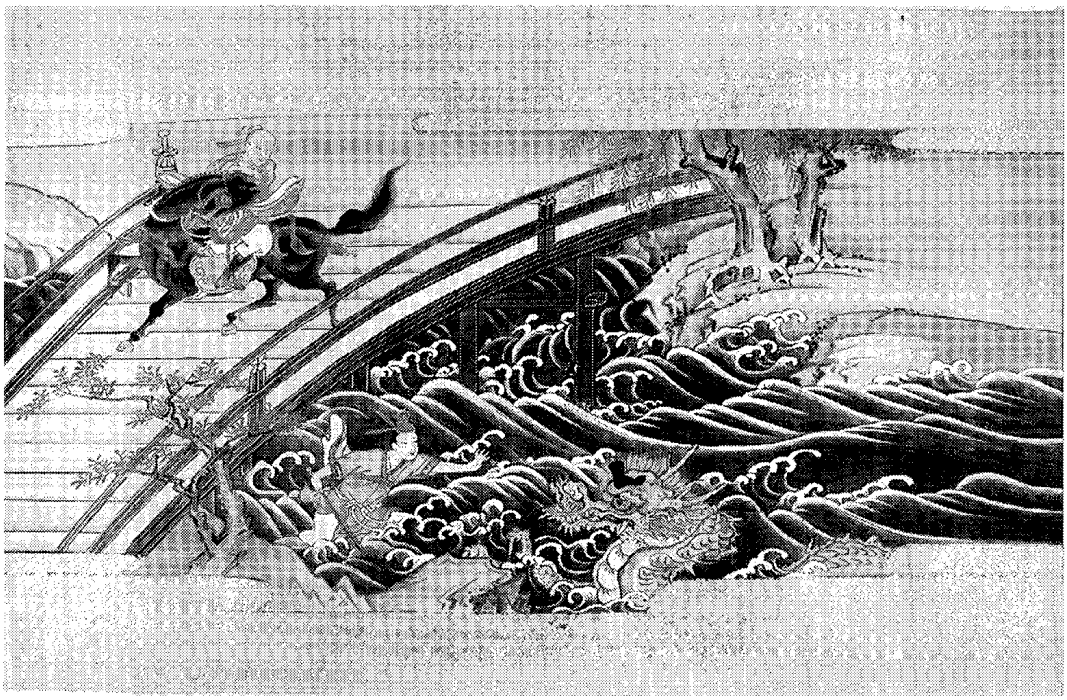
四　挿絵の霞や構図など

まず最初に、奈良絵本や絵巻に特徴的な霞の形状について確認しておくことにする。奈良絵本の霞については、これも伊藤慎吾氏がその形式を分類している。[18] その分類に従って検討すると、御伽草子『張良』乙本の四本には、絵巻と絵本の区別なく、同じ形式の霞が描かれている。無地の料紙に金の切箔をまばらに散らし、輪郭線は黒い

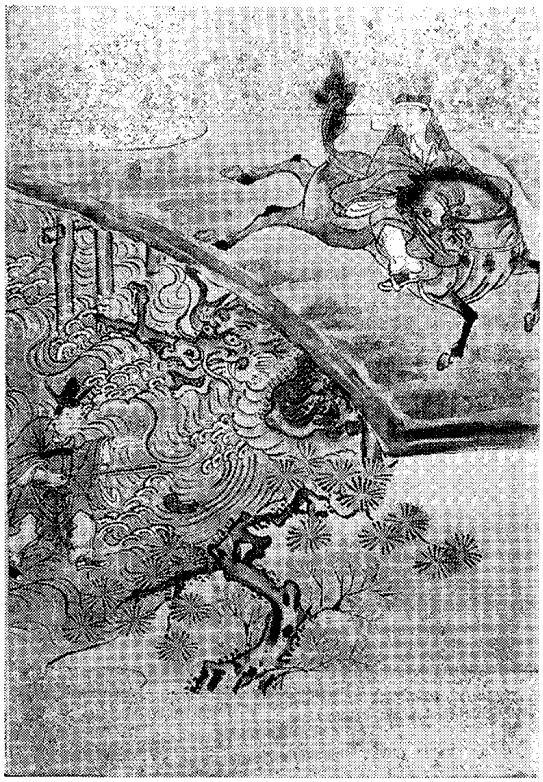
上③　沓を拾う張良



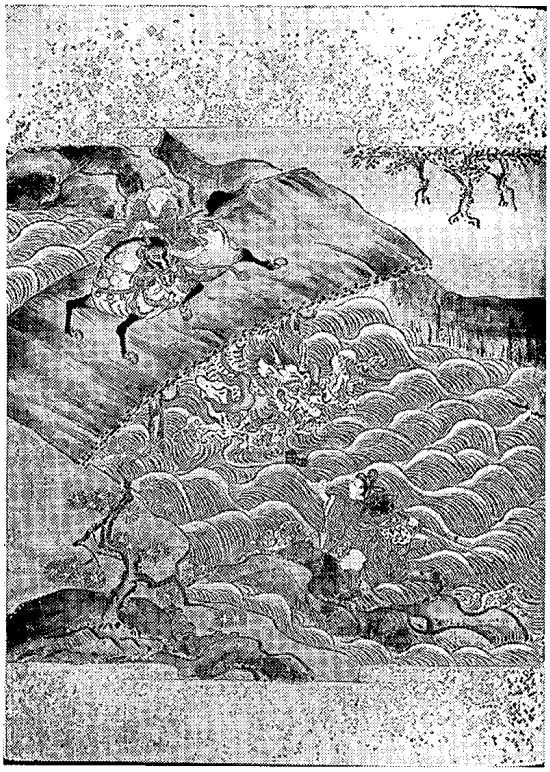
学習院大本



國學院大本



中京大本



大阪大谷大本

下描線の上を細い金泥の線でなぞっている。これは、中京大本や大阪大谷大本と同じ特大縦型絵本である、前述の『竹取物語』絵本も同じである。先ほど、乙本の四本が同じ工房で作られたかどうかについては、もう少し検討の必要があると述べたが、挿絵の霞の形式を見る限り、四本はやはり同じ工房の製作物と考えて宜しかろう。さらに中京大の『竹取物語』も、同じ工房で作られたものなのかもしれない。

そのことを証するように、半紙縦型絵本の『源氏物語』六帖には、全く違う霞が描かれている。水色の地に白い単線の輪郭が施されているのである。『源氏物語』六帖は装訂も袋綴ではなく、半紙縦型によく見られる綴葉装（列帖装）である。『源氏物語』六帖は詞書き筆者こそ同じであるものの、別の工房で作られたものと解するべきなのであろう。

次に、御伽草子『張良』乙本四本の挿絵の構図を比べてみたいと思う。前々頁と前頁に、上巻の第三図である、子房取履譚の沓を拾う場面を並べてみた。この場面は、いずれも老人が馬に乗り、橋の下には大蛇がいる。『史記』留侯世家や『漢書』張良伝には、老人が馬に乗ってきたという記述も大蛇が登場する記述もないが、中世以来、これらの絵のような理解がなされてきたことについては、黒田彰氏が詳細に論述しているので[19]、それに譲ることとする。

学習院大本は絵巻であるから、形態上絵が横長になる。しかしながら、老人、すなわち黄石公と張良の位置取りは中京大本と一致する。実は、この挿絵に限らず殆どの挿絵において、学習院大本と中京大本は構図がよく似ている。人物の描き方も黄石公の容貌こそ全く異なるが、ほかの挿絵における武将の顔の描き方など、かなり似通っている。同一の絵師によるものとして良いかどうかは判断を留保するが、同じ雛形を利用したことが推定できる。この両本の挿絵が、同じ雛形を利用しうる近しい関係の絵師によって描かれたと想像することは、許されるであろう。

それに対して大阪大谷大本は、黄石公と張良の位置取りが逆になっている。同本の挿絵は、この挿絵に限らず、中京大本のそれと構図が異なっている。全体に遠景でとらえた挿絵になっていて、人物は小さめに描かれる傾向があるようである。先ほど、中京大本と大阪大谷大本は表紙の形状や寸法、詞書き本文の字面高さ、料紙の下絵等、そっくりだと記した。さらに詞書きの筆跡も同一と判定した。しかしながら、挿絵については、明らかに異なる絵師が担当したもののようである。

最後に國學院大本の挿絵だが、これまた独自の構図をとる。大蛇と張良の位置取りがほかの三本と異なり、橋も欄干のある木の橋が描かれている。さらに國學院大本の特異な点は、拾うべき沓が大蛇の頭の上にあることで

ある。再び宮田和美氏の論考を眺めてみると、「今一本の大蛇は、どうしたことか沓を頭に戴いている。絵師の合理的な解釈が働いたものだろうか」とある。[20] 宮田氏が見たもう一本とは、國學院大本だったのであろう。

御伽草子『張良』の乙本四本の挿絵を比べてみると、詞書きの筆跡とは異なり、霞の形状は全て一致しながら、構図は絵巻の学習院大本と絵本の中京大本が一致し、他本はそれぞれ異なるということがわかった。同じ工房が製作した同内容の絵巻・絵本であっても、絵師が異なったり、構図が異なったりすることがあったようである。

さて、御伽草子『張良』の乙本四本の挿絵は、基本的に上巻六図、下巻五図となっている。ところが中京大本は上巻に五図しかない。他本に見られる第六図、すなわち沛公と配下の武将達が咸陽宮もしくは覇上に在陣している様子を描いたと見られる挿絵がないのである。中京大本に、絵が剝がされたような形跡はない。國學院大本は第六図が上巻の詞書きの終わった最後に付されているから、中京大本も詞書きの後に第六図があり、上下巻合綴された際に落ちたということも考えられる。しかしながら、その場合は見開きでなく半葉の挿絵であったはずである。裏が白紙になってしまうので、可能性は低いであろう。

御伽草子『張良』乙本の挿絵は、詞書きのどこに挿入されるか、基本的にきっちり決まっていたようである。上巻第一図、すなわち張良が配下の者と始皇帝暗殺の軍議を催していると見られる図が、國學院大本で他本よりほんの少し後に位置していることを除けば、挿絵の位置はどの本も全く同じである。ところが上巻第六図のみ、学習院大本、國學院大本、大阪大谷大本の三本で、それぞれ場所がずれているのである。その理由はよくわからないが、もともとなければならない挿絵ではなく、サービスで一枚多く付しました、というような性格のものであったのかもしれない。[21]

注

（1）「「張良」の大蛇」（「能楽タイムズ」三六八、昭五七・一一）。
（2）「能と注釈1「張良考」」（『中世説話の文学史的環境』昭六二　和泉書院）四〇〇頁。
（3）「スペンサー・コレクション巻子絵巻「ちゃうりゃう」」（「二松学舎大学東洋学研究所集刊」二三、平五・三）。
（4）注（1）に同。
（5）小林健二氏「幸若舞曲の絵入り本」（『中世劇文学の研究—能と幸若舞曲—』平一三　三弥井書店）五六九頁。黒田彰氏が、「本文は舞曲『張良』で、大頭流系と思しい」とする絵巻と同一か。
（6）図版三八頁。
（7）平九、思文閣出版古書部、一六六～七頁。
（8）京大本の存在ならびに本文については、柴田芳成氏のご教示による。同本は状態が悪く、現在閲覧不可とのことである。
（9）昭五一、弘文荘、七三頁。DVD版『弘文荘待賈古書目』（平一四　八木書店）による。
（10）「針見当退隠の弁—続書誌学酢豆腐譚—」（「鶴見日本文学会報」四二、平一〇・一）参照。
（11）「近世前期奈良絵本の本文製作—針目安をめぐって—」（「国語国文」六九—四、平一二・四）。
（12）『奈良絵本・絵巻の生成』（平一五　三弥井書店）等。
（13）『古典籍下見展観大入札会目録』（昭六二　東京古典会）目録三頁。
（14）注（12）同書二一八頁、三四八頁。
（15）注（12）同書三五一頁。
（16）宮次男・佐藤和彦両氏編『太平記絵巻』（平四　河出書房新社）との比較による。
（17）注（12）同書四七頁。

(18) 「奈良絵本の霞—その形式と意義—」(「奈良絵本・絵巻研究」二、平一六・九)。
(19) 注(2)に同。
(20) 注(1)に同。
(21) 柴田氏によれば、京大本も上巻五図とのことである。

〔付記〕本稿解題は、平成十九年度中京大学国文学会秋季大会における口頭発表にもとづくものである。席上貴重なご意見を賜った方々、筆跡等についてご教示賜った小林健二氏、石川透氏、京大本の存在についてお教えくださった徳江元正氏、柴田芳成氏、中京大本の撮影に際して協力を得た長友秀暁氏、鈴村友子氏に、心からの御礼を申し上げる。またご所蔵本の閲覧ならびに図版掲載をお許しくださった大阪大谷大学図書館、学習院大学日本語日本文学科研究室、國學院大學図書館、中京大学図書館の方々に、深甚の謝意を捧げる次第である。

なお本稿は、平成十七年度中京大学特定研究助成・共同研究(A)「本学図書館蔵奈良絵本・絵巻の総合的研究」による成果の一部である。

翻刻

○以下は、中京大学図書館蔵奈良絵本『張良』（貴一四八）の翻刻である。
○詞書き本文は原本に忠実であるように努めたが、旧字・異体字はおおむね現行の書体に改めた。私に句読点を加え、さらに改行を加えて読解の便宜を図った。また、上巻と下巻の間は一行あけとした。
○挿絵図版は、解題中に掲げた上巻第三図を除き、まとめて後掲した。

それ四かいをおさめて、天下に良将の名をほとこすことは、かならすしもこゝろたけく、ちから人にすくれたるをもつてせす。たゝ仁義あつくして、つはものをないかしろにせす、忠節をつくして、わたくしなく、はかりことかしこくして、心たゆまさる時は、そのこゝろさし天理にかなひ、人みな是にしたかひて、てきはをのつからしりそき、国家すなはちたいらかなり。これを名つけて、忠臣良将とす。いはゆる呂望は、周の武わうをた[二オ]すけ、范蠡は越の勾践をすくふ。是みなその君の非をいさめ、善をすゝめて、天下をおさめし忠臣なり。その外代々の君わう、いつれか忠臣良将の功によらすして、天下をたもちしためしをきかす。

こゝに漢の高祖の臣下張良と聞えしは、あさなをは子房と名つく。その先祖をたつぬれは、韓の国の臣下として、昭王より悼恵王まて五代の間、代々につかへて、わたくしなし。しかるに秦の始皇のときにいたりて、韓の悼恵わう、すてに始皇のために[二ウ]ほろほされ給ふ。このとき張良、いまたとしわかくして、身をかくしてのかるゝことをえたり。張良、つら〳〵おもひけるは、我いかにもして始皇をころして、我君のうらみをはらすへき

とおもひ、家のらうとうおほきなかに、ちからつよきもの三百人をかたらひて、くろかねをもつて、おもさ百二十斤のまろかしをつくり、始皇のみゆきをまちゐたり。」二オ

〔上巻第一図〕」二ウ

始皇、これをは夢にもしろしめされす。あるとき、す百よきをしたかへて、陽武といふ所よりみなみにあたりて、博狼沙といふところをとをり給ふに、張良かつはもの、これをまちうけ、草村のうちより、ひそかにかのくろかねのまろかせを、始皇のくるまになけかけるに、その間半町はかりへたてたれは、まろかせのとひゆくうちに、始皇の御くるまはゆきすきて、跡なるくるまにあたりけれは、そのくるま、たちまちにみちんにくたけ、のりた」三オる人、おなしくうちくたかれて、むなしく成。張良かつはものとも、ほいなき事におもひて、あとをかすめてかくれけり。始皇のつはものとも、大きにおとろき、馬をはせてをひゆき、こゝかしこをたつぬれとも、さらに人はなかりけり。山のうちへやかくれぬらんと、谷みねをさかしけれとも、そのかくれかはみえさりけり。こゝに、一人柴をかるものゝありけるをとらへて、たかて小手にいましめて、始皇の御前にめしいたす。なんちはいかなるもの」三ウなれは、我むかつてあたをなすそと、ありけれは、それかしは、河南と申すところの木こりにて侍るなり。まつたく君にむかひて、なにのあたをか、なし奉るへき。けに〳〵此ほとうけ給はりしは、韓の悼恵わうの臣下に、張良と申すもの、君をうらみたてまつり、その一そくらうとうの中に、ちからつよきものともを三百人かたらひて、君をうかゝひ奉ると、つたへきゝ侍る。もしもこれらかしわさなるへきにやと、申あけれは、始皇、きこしめされ」四オて、さては、なんちかしるへきところにあらすとて、すなはちなはをとき

て、」四ウゆるされけり。しくはうは、それよりみやこにかへらせ給ふ。」五オ

〔上巻第二図〕[五ウ六オ]

始皇おほきにいかりて、天下にちよくをくたし、張良といふものを、もしはいけとり、もしはかうへをはねて、みかとにたてまつらむものをは、たとひその一そくらうとう也といふとも、命をゆるし、こかね一万斤を給はるへしとそ、ふれられける。かゝりしかは、張良も身をかくすへきところもなし。あまつさへ、その一そくらうとうの中にも、一万斤のこかねにふけりて、ひまをうかゝひ、ねらひけるもの、いろにあらはれて見えけれは、たのむ木[六ウ]のもとに雨のもる心地しけり。張良、かなはしとおもひて、夜にまきれて家をたち出て、下邳といふところにけゆきて、名をかへ、かたちをあらためて、しはらく身をかくしゐたり。

有とき張良、やとをたちいてゝ、下邳の橋をわたらんとしたりけるに、としのころ八十にあまりたる老翁、ふとくたくましき馬にのりて、きたりけるか、はきたるくつを、馬のうへより河の中におとしつゝ、張良にむかつて申すやう、いかになんち、[七オ]あのくつをとつて、我にはかせよといふ。張良、これをきゝて、にくきおきなかこと葉かな。礼義をもしらて、われにむかひて、くつとつてはかせよといふこそ、やすからね。うたはやとおもひて、剣をぬかんとせしか、こゝろのうちにおもひ返しけるやうは、いや〳〵むかしもためしあり。侯嬴は、公子にくつはみをとらしめて、そのこゝろをためし、王生は、張釈にわらくつの緒をむすはしめて、そのむねを心みし。いまもつてこれにおなし。いかなれは、[七ウ]我にむかひてくつをとらせん故なし。もしわかこゝろをためして見るにや。たとへはしからすとも、おひたるをうやまふことは、をのれか父母のことくせよといふ事あり。沓をとつてはかせはやとおもひ、はしよりしたにとんてをり、なかるゝくつをとらんとす。

もとより下邳の川と申すは、そこふかくして、きしとをし。なかるゝ水、矢をいるかことくなれは、張良、水にをりひたりて、とらんとするに、かなはす。いかゝはせんと、あきれたるはかりなり。[八オ]かゝりしところに、川

のなかれ、なみをたたみ、さかまく水のをと、しきりなり。張良、手をあけて、すてに水におほれんとす。たちまちに、水のそこより、そのたけ二十丈もあるらんとおほゆる大蛇、うかひ出て、なかるゝくつをとつて、張良にむかひてすゝみきたる。張良、すこしもさはかす、剣をぬきてまちかけたり。大蛇も、これをおそれす。かのくつを張良にあたへて、すなはち水底にそ入にける。一八ウ

〔上巻第三図〕一九オ

張良、くつをうけとり、いそき川よりはせあかり、はしのうへにきたつて、ひさまつきてたてまつる。おきなはすこしもれいきなく、あしをさしいたして是をはき、もちたるむちにて張良かかしらをなてゝ、いひ出すこと葉もなく、うちわらひてゆきすきたり。

張良、ふしきにおもひ、あとをはるかに見おくりて、たちやすらふところに、やう〳〵一里かほともゆきぬらんとおもふに、かのおきな、たちかへりて申けるは、なんちはその心たけくし一九ウて、しかもとをきおもんはかりあり。ちかきうれへの、なかるへきものそかし。それ、人は強忍とて、物ことにかんにんあるをもつて第一とす。百たひたゝかふて、百たひなからかつことありとも、ひとたひ忍ふにはしかしといふ事あり。身をほろほし、家をうしなふことは、かならすしもかんにんすることなきによれり。我、さきに、なんちに無礼をなす。さこそ心には、いかり、うらみつらん。しかれとも、ひとたひこれを忍ひて、我ためにくつをとる二オ事、われ、是をかんするところなり。しかるに、我にひとつの秘術あり。なんちにをしへて、つたふへし。いまより五日といはんあかつき、このはしにきたるへし。そのとき、是をさつけん。かならすをこたることなかれと、かたくけいやくしけれは、張良もあやしくおもひ、すなはちこれをりやうしやうして、をの〳〵ゆきわかれたり。

かくて張良は、五日といふあかつきに、かの橋にたちいてたれは、おきなは、ゝや、それよりさきにきたりて、

橋」ートウの上にありしか、色をそんし、いかりをなして申けるは、なんち、おきなとかたくけいやくしなから、いかにしては、おそくきたりけるそや。さやうに心をこたりては、なにの大事をか、ならひえん。よし〳〵いまは家にかへり、けふよりまた五日といはんとき、かならす爰にきたるへしとて、おきなは、すなはち行さりけり。張良、けふのをそかりしことを、くちおしくおもひて、それよりしゆくしよにたちかへり、このたひは、いかにも身をきよめ、心を」ートオきよめて、衣冠たゝしく出たち、五日といふ夜半はかりに、下邳のはしにそ出たりける。しはらく有て、おきな、馬にむちをすゝめて、はしの上にきたりつゝ、張良をうち見て、大きによろこひていはく、よきかなや。なんち、人に大事をさつからんとするには、かくこそはあるへけれ。こゝろをこたりては、そのせんなし。それ、みたるゝをおさめ、てきをしりそくることは、はかりことにあつて、さらに軍勢のたせうによらす。運は天理のときに有。いく」ートウさやふるゝとも、みたりに命をすつることなかれ。つはものおほしといふて、てきのつよきにむかつてすゝむることなかれ。ひくへきときにちんをしりそくは、これ、にくると云にはあらす。つはものゝ命をまつたくして、のちにひらくる運をまたんかためなり。くんせいにむかひて、礼義をあつくする事は、これ、へつらふといふにはあらす。心をひとつにして、いくさをすゝめんかためなり。されは、天の時は地の利にしかす、地の利は人の和に」ートオしかすといふ事有。天に孤虚わう相の時あり。地にまた八陣のそなへあり。天の時をえたりといふとも、地のそなへたかふときは、そのいくさかならすまけて、てきのためにくるしめらるへし。たとひ天の時にかなひ、地の利をはえたりといふとも、くんせいのこゝろひとつならすは、またそのえきあるへからす。たゝつねに、つはものゝこゝろをひとつにして、おこりをとゝめ、礼をあつくせよ。我、こゝに一巻の書あり。これをなんち」ートウにつたふるなり。これ、いにしへ太公望か乱をしつむるはかりことなり。つゝしみてよくきけ。これをよみて、このむねをおこなはゝ、かならす天子の師となり、天下の名大将と

あふかるへし。いまよりのち十年には、なんち、かならす万戸のくらゐにいたるへし。十三年の後に、済北の穀城山のふもとにして黄石とあらはれ、二たひなんちにあふへしと、いふかとすれは、かきけすことく、うせにけり。」十三オ

〔上巻第四図〕」十三ウ

張良は、すてに一巻の書をさつかりて家にかへり、夜あけて是をみるに、太公望かひやうほうを、そのこと葉つゝまやかにかきあらはしたり。いまにつたはる三略といふ兵書、これなり。張良、つねにこれをよむ事、露はかりもおこたらす。つゐにいくさのはかりことに、そのしんへんをえたりき。

かゝりけるところに、楚の項羽のおちに項伯と云ものあり。人をころして、そのとかのかれかたし。身のをきところのなきまゝに、下邳の里に」十四オにけきたり、張良かもとにたちよりて、たのむへきよしいひけれは、張良、ふひんに思ひて、すなはち我家にかくしをきて、さま〳〵いたはりけるほとに、かうはく、大きによろこひて申けるは、我すてに身をかくすへきところなく、いのちあやうかりしを、君にたすけられて、なからへけるこそうれしけれ。もしもことのしさい有て、たとひ我となんちと、てきみかたにゆきわかるゝとも、心はさらにそむくまし。大事のはかりことあらんときは、」十四ウかならすなんちにつけしらすへしと、かたくけいやくしたりけり。

爰に秦の始皇帝は、六国をうちしたかへ、そのいきほひ、天下にはひこりしかとも、天めいかきり有て、つゐに沙丘といふところにて、ほうきよなりけるを、驪山といふところに、おさめてたてまつる。天下の事は、趙高といふ臣下のはからひなりけれは、第一の太子扶蘇と申すをは、趙高、ころしたてまつりて、をのれかやしなひし第二の太子胡亥を天子になして、二世皇帝とそ申」十五オける。のちに是をもころして、趙高、天下をうはひけるを、胡亥の御子に子嬰と申太子あり。てうかうをころして、ふたゝひ天下をとり返し給ひて、みつから天子と成

給ふ。これを三世皇帝とそ申ける。

この時にあたつて、楚国には項羽、つはものをおこし、沛郡よりは沛公、いくさをもよほすと聞えしかは、項伯はかうのかたにはせくはゝり、張良は百よきのつはものをしたかへて、沛公の陣にくはゝる。はいこう、すなはち張良にたいめんし給ひ、」上五ウやかて廐の将といふ官をさつけ、そのはかりことをもちひ給ふに、つはものみなきふくして、その勢、ほとなく十万よきに成たり。僕陽といふところのひかしにて、いくさたちして、しんの国にせめのほり給ふ。楚のかうは、みつから四十万騎をしたかへて、雍丘といふところの西にいたる。すてに項羽と沛公とたいめんして、しゆえん有ける。そのとき、ともにけいやくしていはく、いつれなりとも、さきにかんやうきうにみたれ入て、秦をほろほした」上六オらんかたを、かならす天下の大わうとすへしと、さためて、項羽と沛公と、をの〳〵にしひかしにわかれて、せめのほる。」上六ウ

〔上巻第五図〕」上七オ

かくてかうは、四十万騎のつはものをしたかへて、距鹿といふところにいたり給ふに、秦の左将軍章邯といふもの、百万きにてあひまちけり。両陣たかひに出あひてたゝかふに、章邯うちまけて、項羽かちんにはせくはゝる。このとき、両ちんにうたるゝつはもの、六十万騎なり。のこるつはもの、あはせて八十まんきをいんそつして、こゝかしこをせめおとすに、やふられすといふことなし。しかれとも、かうは美女をあひして、酒をこのみしかは、みちにて」上七ウ日かすをおくりて、つゐにいまたかんやう宮にいたらす。

沛公は、その勢わつかに十万よき成しかとも、礼をあつくして、民をあはれみ、酒をこのます、をこりをきはめす。このゆへに、そのみち、きはめたる難所成しかとも、さゝへてふせく城もなく、かうさんせさるつはものもなけれは、みちひらけて心やすかりけるゆへに、かうにさきたつ事三月にして、かんやうきうに入給ひけれは、

秦の国、みな沛公にしたかひけり。これ、張良かはかりことによるものなり。」十八オ三世子嬰皇帝もかうさんし給ひ、沛公にしたかひ給ふ。すなはち、張良をは成信侯にふうせられたり。やかてつはものをつかはし、函谷のせきをかためて、かううをかんやうきうにいれたてしと、はからひ、はいこうは、覇上といふところにそおはしける。」十八ウ

かゝりしところに、かうう、百万騎のつはものをしたかへ、かんこくの関にうちいらんとしけるに、関の戸かたくとちて、かううをいれたてす。かうう、大きにいかりて、當陽君といふ将軍に二十万騎をさしそへ、かんこくの関をうちやふり、かんやうきうにせめいりけれは、秦のつはもの、かううの軍勢をふせきて、しはらくたゝかひけれとも、かなはすして、みなちり〳〵に成にけり。かうう、かつにのりて、せめつゝみをうつてをしよせ、かんやうきうにみたれ入て、すなはち火をかけたり」一オけれは、かんやうきう、四はう三百七十里につくりならへたる宮殿ろうかく、一とうにもえあかり、ひとつものこらすやけくつれて、その火、九十日まできえさりけり。秦の三世子嬰皇帝も、此ときにあたつて、」一ウかううかためにころされ給ひて、秦の代、たちまちにほろひけるこそあはれなれ。」一オ

〔下巻第一図〕」一ウ三オ

さるほとに、かううは百万騎のつはものをあつめて、新豊の鴻門にちんをとり、高祖はわつかに十万よきにて、かんやうの覇上におはします。そのみち、わつかに三十里をへたてたり。

しかるに、項羽か臣下に范曹といへるもの、かううにつけていはく、沛公、そのかみ沛郡にありしときは、美女をあいし、たからをむさほり、酒をこのみしか、いま、このかんやうきうにせめいりしよりこのかたは、美女を

もあいせす、たからをもむさほらす、民をあはれみ、つはものをめくむ。これ、すなはち」三ウその心さし、ひとへに天下に大わうたらんことをのそむ。これ、かならす張良といへるものゝはかりこと、かしこき故なり。いそき沛公をうち給へと、すゝめけれは、項羽、けにもとおもひ、四十万騎のつはものをさしつかはし、范曹を上将軍として、夜あけなは、いそきはいこうをうつへしとそ、さためける。

こゝに、かううかおちに項伯といへるは、むかし張良かなさけによりて、露の命をたすかり、けいやくかたくして行わかれて、かううかちんに有けるか、此事をきゝて、」四オこゝろにおもひけるは、みかたは四十よ万騎なり。はいこうはわつかに十万騎。かゝる無勢にては、かならすはいこう、うちまけ給ふへし。張良にこの事をしらせて、いつかたへもおとさはやとおもひて、その夜、いそき張良かもとにゆきて、かたりけるは、こととのてい、まことにきう也。今夜、いそきいつかたへもにけさりて、いのちをたすかり給へとそ申ける。

張良は、もとよりもはかりことかしこく、義をおもくして、忠をもつはらとするものなりけれは、なに故か、身のかなしき」四ウにまかせて、かうそをすてゝ、いつかたへかは、にけさるへきといふて、やかて此よしを沛公にかたる。はいこうきこしめして、いかゝすへきと、の給ひけれは、張良こたへていはく、みかたのつはものは、わつかに十万よき、かううかつはものは四十万騎なり。このひら野にてたゝかはゝ、かつことあるへからす。されはとて、けんその地もなし。とかく項伯を御前によひ出して、沛公と兄弟ならんことをやくそくし給ひ、まつこのたひは、ことの無為ならんやうにし給ひ」五オて、天めいをまち給へと申けれは、かうそ、けにもとおほしめし、すなはち、かうはくをかうその御まへによひいたし、まつ酒をすゝめてことふきをなして、沛公かたりていはく、はしめ、かううと我とけいやくをなしけるは、さきにかんやうきうにせめいらんものを、天下の王になすへしと、さためたり。我、かううにさきたちて、かんやうにせめいること、七十日にあまれり。されとも我、さ

らに天下の大わうなるへしとは、露はかりもおもふ事なし。つはもの」[ハウ]をつかはして、かんこくの関をまもらせしことは、まつたくかううをふせくにはあらす。らんはうのぬす人を、とゝめんかためなり。ねかはくは、このよしをかううにかたりて給はるへし。我、明日はそのちんに行て、つみなきとをりを申ひらくへしとて、わうこん百斤を出されたり。かうはく、すなはち、我にまかせ給へと申て、馬に打のりて、わかちんへそかへりける。」[ハオ]

〔下巻第二図〕」[ハウ]

去ほとにかうはく、項羽のちんにかへりて、沛公の申さるゝところをつふさにかたりて、かさねて申けるは、そも〳〵沛公、かんこくの関をやふりて、秦をうちしたかへすは、いかてかかうう、いまたやすく、こゝにきたり給はんや。これ、天下の大こうは、しかしなから沛公にあり。しかるに、はんそうかこと葉にまかせて、功ある人をうち給はんは、天のみちにたかふにあらすや。たゝ沛公とましはりをふかくして、ともに天下をおさめ給へと申けれは、項羽、けにもとおもひて色をなをし、」[ハオ]すなはち、いくさをとゝめられけり。

かゝるところに、はいこう、百よきのつはものをしたかへて、新豊の鴻門にきたり給ひ、かううにまみえて、れいきあつし。かうう、まことに心とけて、すなはち、しゆえんにおよひけり。范曹、おもひけるは、沛こうをうたん事は、今日にあらすはかなふへからす。もし此たひもらしなは、項羽は、むなしくはいこうにころされ給ふへし。いかさまにも、沛公をたはかりころさはやとおもひ、かうさうといふ臣下をよひたてゝ、なんち、沛公の前にさかつ」[ハウ]きのあらんときに、ことふきして、つるきをぬきて、たつて舞へし。我もその時、もろともに立て、まふかことくにもてなし、沛公をうつへしと、さためたり。

かうさう、すなはち、さしきに出て、みつからしやくをとり、はいこうをことふきす。はいこう、さかつきをか

たふけ給ふとき、かうさう申ていはく、わか君、沛公としゆえんあり。軍中ひさしく、をんかくをなさす。たゝいまわれ、剣をぬきて、太平のきよくをまふへしとて、すなはち剣をぬきてたつ。そのとき、はんそうも」八オもろともに、剣をぬきてさしかさし、沛公のまへに立よりけり。項伯、かれらか気色をみて、沛公をうたせしと思ひ、われもともにまふへしとて、おなしくまた剣をぬきて、立てまふ。はんそう、沛公にちかつけは、かうはく、身をもつてたちかくしけれは、楽すてにをはらんとするまて、はいこうをうつ事かなはす。

張良、やすからすおもひて、門前にはしり出、はんくわいをまねきて申けるは、はんそう、つるきをぬきて、立てまふ。その心、すてに沛公をうたんとすと、か」八ウたりけれは、はんくわい聞て、さては一大事、のんとにせまれりとて、かふとのををしめ、たてをわきにはさみ、軍門にいらんとす。けいこのつはもの五百人、これをいれしとふせきけり。はんくわい、大きにいかりをなし、くろかねのたてを身にひきそはめ、門のくわんの木七、八本をしをりて、うちへはしりいれは、たをるゝとひらにうちたをされ、くろかねのたてにつきたをされて、五百人のつはもの、地にふしかさなりて、おきあからす。はんくわい、すてにまくのうちにかけ」九オいりて、目を見ひらきて、かううをはたとにらむに、まことにいかれるよそほひ、たけくみえて、かしらのかみ、さかさまにたちあかりて、かふとのはちをつらぬき、両のまなしりさけて、血なかれたり。そのたけ九尺七寸ありて、」九ウいかれるひけ、右ひたりにわかれたるか、ほこをつきて立たる有さま、いかなる鬼神もおそれなんとそ見えたりける。」一オ

〔下巻第三図〕」一ウ一オ

かうう、是をみて、みつから剣をぬきかけて、なんちはなにものそと、の給ふ。張良かいはく、これは沛公のつはものに、はんくわいと申すものなりとそ申ける。そのときかうう、これはたけきつはものなり。酒をのめと有

けれは、一斗をもるさかつきに、さけをたふ〳〵とさしうけて、三度までのみて、ゐのこのかたもゝを、さかなにいたしけるを、すこしものこさすくらひて、いさゝかもみたるゝけしきなし。沛公は、かはやにゆくまねをして、はんくわいをまねきてかへりたまふに、」十一ウきんきやう、紀信、はんくわい、かこうえいといふ四人のものとも、たてをもち、ほこをとりて、はいこうを馬にのせ、わきみちより覇上のちんにかへり給ふ。

しはらく有て、張良、かうにむかひて申すやう、沛公さけにえひて、礼をわすれてかへりぬ。それかしをはとゝめをきて、是をたてまつるへしと、申をかれ侍るとて、白璧一双を奉る。かうう、是をよろこひ、天下のてうほうなりとて、てうあひし給ふ事かきりなし。張良、また玉のさかつきをとりいたして、范曹かまへにをきて、」十二オ是は、沛公より足下にたてまつらるゝと申けれは、はんそう、これを地になけ、なみたをなかして、白へきはてうほうなりといへとも、天下にはかゆへからす。我、これをはかれとも、さらにそのせむなし。項わうの天下をうはゝんものは、沛公なりとて、かううをはたとにらみけれとも、かううはえひふして、これをきゝいれす。張良も百よきをしたかへて、覇上に立かへりけり。かゝりしのちは、かううとはいこうと、かさねてたいめんあることなし。

天下をあらそふけしき、外にあらは」十二ウれて、国々のつはもの、両はうにわかれ、くはゝる。漢楚ふたつにわかれて、四かいの乱やむことなし。かんのかうそのかたには、陳平、張良、磐噲、酈食其なとをさきとして、その勢つかふ三十万騎也。楚のかううのかたには、西陰わう、常山わう、張耳、項梁をはしめとして、その勢つかふ四百万騎なり。かうそのかたは無勢なりけれは、たひ〳〵いくさにうちまけ給ふ。これひとへに、かううの臣下、范曹かはかりことの故そかし。いかにもして、はんそうをうつへしとこそ、せんきしけれ。」十三オ

あるとき、かううのかたより、かうそのかたへ、使者をつかはしけるに、張良、これにたいめんし、まつさけを

すゝめんとて、山海のちんふつをとゝのへ、さかなをかす〳〵いたし、こかね四万きんをつかひのまへにとりすへ、その外いろ〳〵のたからものを、山のことくにつみかさね、ひきて物にそしたりける。張良、さま〳〵物かたりして、とかくはんそうの御心と、我らの心をひとつにせすは、かううをうつこと、かなふへからす。いよ〳〵はかりことをたのみたてまつると、いひけれは、ししや、[十三ウ]すこしもこゝろえす。それかしは、かううの使者にてこそあれと申けれは、張良、いつはりおとろきていひけるは、我、なんちをはんそうのつかひなりとおもひて、一大事のはかりことを、かたり出しけるこそくやしけれ。さてはなんちは、かううのししやにてありけるものを。これ、とりつくひとのあやまりなりと、いふて、さま〳〵につみをきたるひきてものを、みなとりかへし、酒もさかなも、みなこと〳〵くとり入て、ふけうにしてこそ、かへしけれ。

使者、はらをたてゝたち[十四オ]かへり、かううに、このよしをかたる。かうう思ひけるは、さては范曹か、てきと心をあはせて、我をうたんとすると、こゝろえて、やかてはんそうにとくをあたへて、ころされたり。[十四ウ]

〔下巻第四図〕[十五オ]

はんそう、すてにむなしく成ければ、かうう、いよ〳〵おこりをきはめ、兵をないかしろにせしかは、かううをうらみてそむき、漢のかうその手にくはゝるつはもの、かすをしらす。さる程に、かううのつはものは、わつかに十万よき、かうそのつはものは、ほとなく八百万騎に成にけり。

張良、いまはときいたりぬと、よろこひ、つはものをすゝめてせめけれは、かうう、かなはしとや思ひけん。かいのしやうにたてこもる。かうその兵、ます〳〵かさなりて、城をとりまくこと、百え[十五ウ]千えなり。こゝに、かううのおもひ人、虞氏といふひしんは、かなはしとおもひて、しかいして、むなしくなる。かうう、いまは心にのこることなしとて、わつかにうちのこされしつはもの、二十八騎をともなひ、城のうちよりきつて出、烏江

と云川のほとりにうち出給ひ、かうそのつはものを、かけやふる。かうそのかたには、わい陰こうか手にしたかふ、つはもの三十万騎、項羽の二十八騎にかけたてられ、三百よきうたれて、にけちりたり。その次に、孔将軍、飛将軍」十六オの手にしたかふ、かうそのつはもの七十万騎、かうをなかにとりこめて、あまさしとせめたゝかふに、五百よきうたれて、四はうにけちりたり。かうのつはもの、二十八騎のうち十一騎うたれて、わつかに十七騎になりにけり。かうう、きすをかうふる事、五十余ケしよなり。そのときかうう、十七騎をしたかへ、かちたちに成て、ひかへたり。

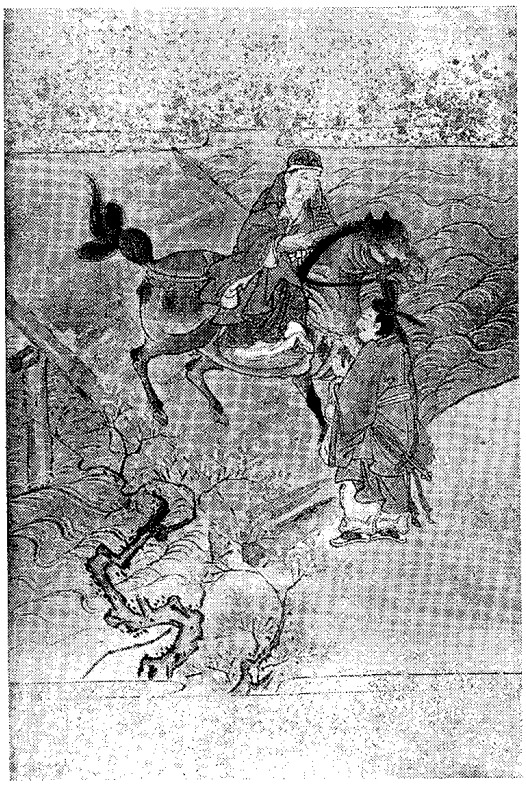
高祖の将軍、せきせんこうとて、大りきのつはもの、かうをいけとらんとて、わか手のらうとう五百よ騎か、まつさきに」十六ウかけちかつく。かうう、めをいからかして、をのれはなにものなれは、我をうたんとはちかつくそと、いかりてにらみ給へは、さしものせきせん侯、のりたる馬もろともに、ふるひわなゝきて、たちすくみたり。かうう、いまはこれまてなりとて、漢の司馬呂馬童といふもの、むかしは項羽の知音也けれは、我首をは、りよはとうにあたゆるとて、かうう、みつから首かききつてさしあけ、立すくみてそ、しにたまひける。」十七オ

〔下巻第五図〕」十七ウ

つゐにかうう、かうそ、八ケ年七十余度のたたかひありしに、かうう、たちまちにうんつきて、をうかうのほとりにむなしくなり、漢のかうそ、いくさにうちかち、天下すみやかにおさまり、漢の世つたはりて、七百年をたもちしことは、これ、しかしなから張良かはかりことよりおこれり。そも〳〵張良は、みつから手にかけて、ほこをふり、いくさをせしこと一度もなし。たゝはかりことをむねとして、かたきをたいらけ、天下をおさめたり。されは漢のかう祖」十八オのいはく、はかりことを帷幄のうちにめくらして、かつことを千里の外に決せしものは、子房なりと、の給ひけり。そのかほかたち、たけからす。いかにもゆうに、うつくしく、さなから児のことくな

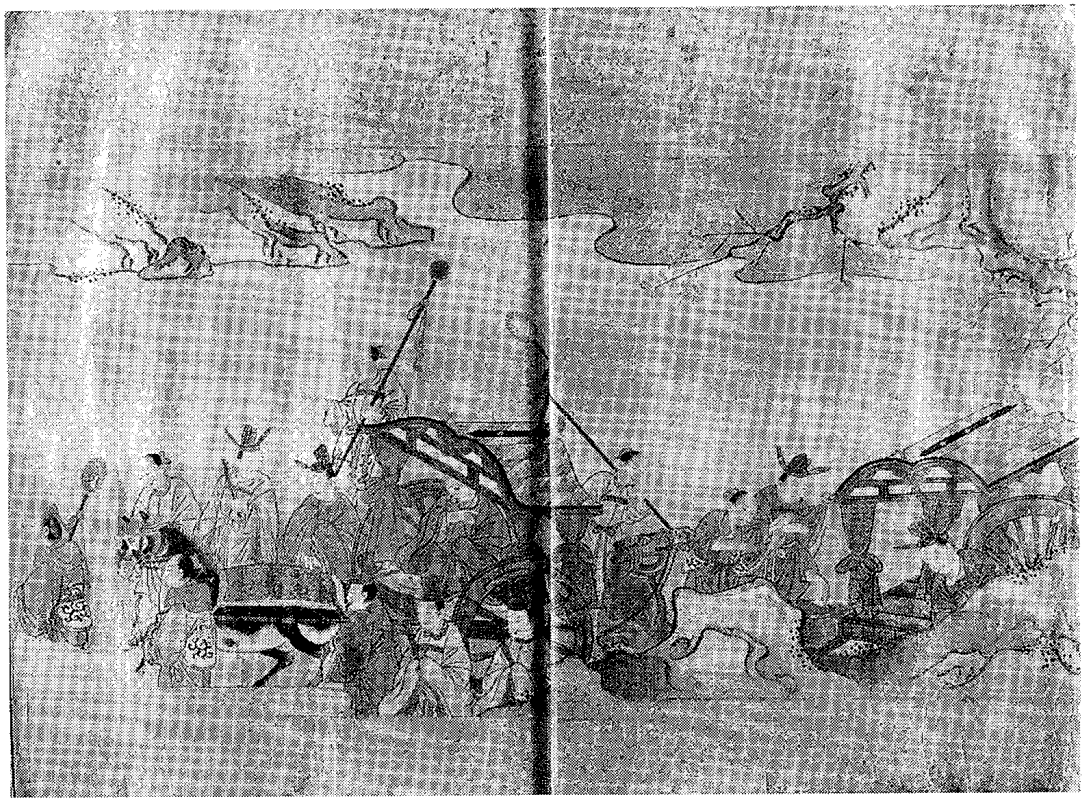
れとも、そのちゑふかくして、はかりことは天下におこなはれて、忠臣良将のほまれをは、いまの世までもつたへたり。さても下邳の里にて、おきなにけいやくせしことく、十三年ののち、穀城山のふもとにして、黄なる石をもとめえて、つねにこれをまつりしか、後に赤松子」十八ウといふ仙人にしたかひて、長生不死のくすりをなめ、こんろん山にのほりつゝ、西わう母ともろともに、命をたもちけるとかや。」十九オ

挿絵

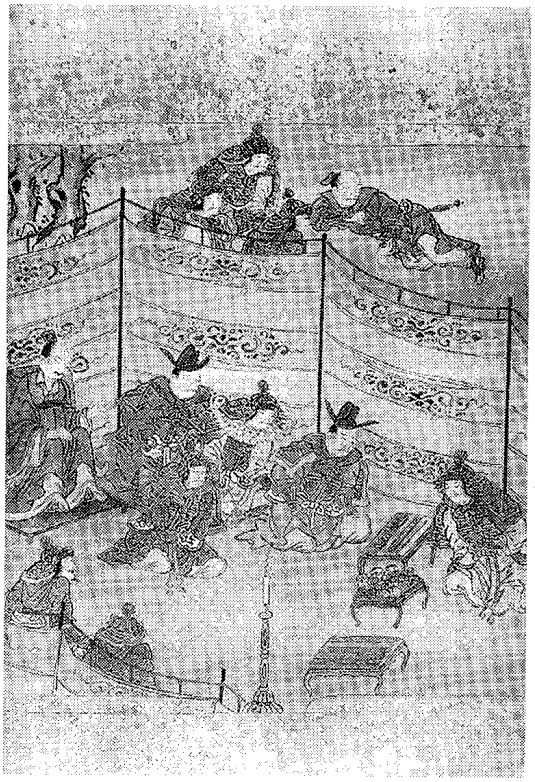


上④　一巻の書を賜る張良

上①　始皇帝暗殺の軍議を催す張良

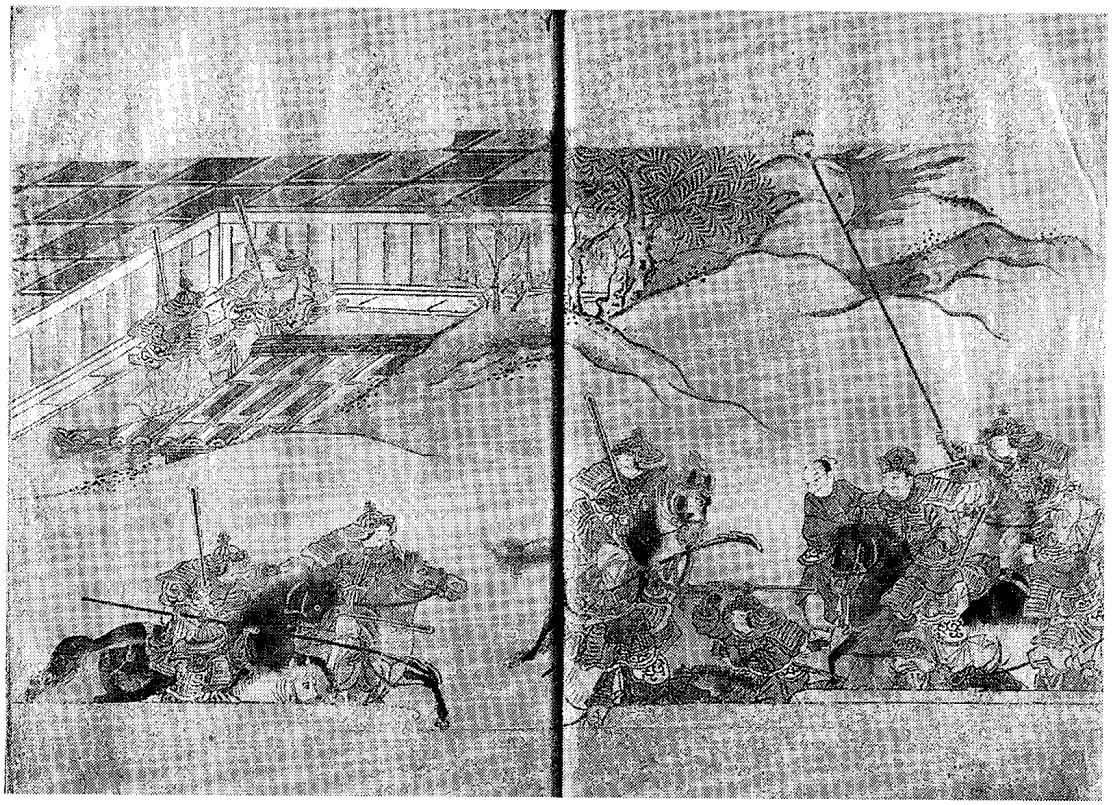


上②　始皇帝暗殺の失敗

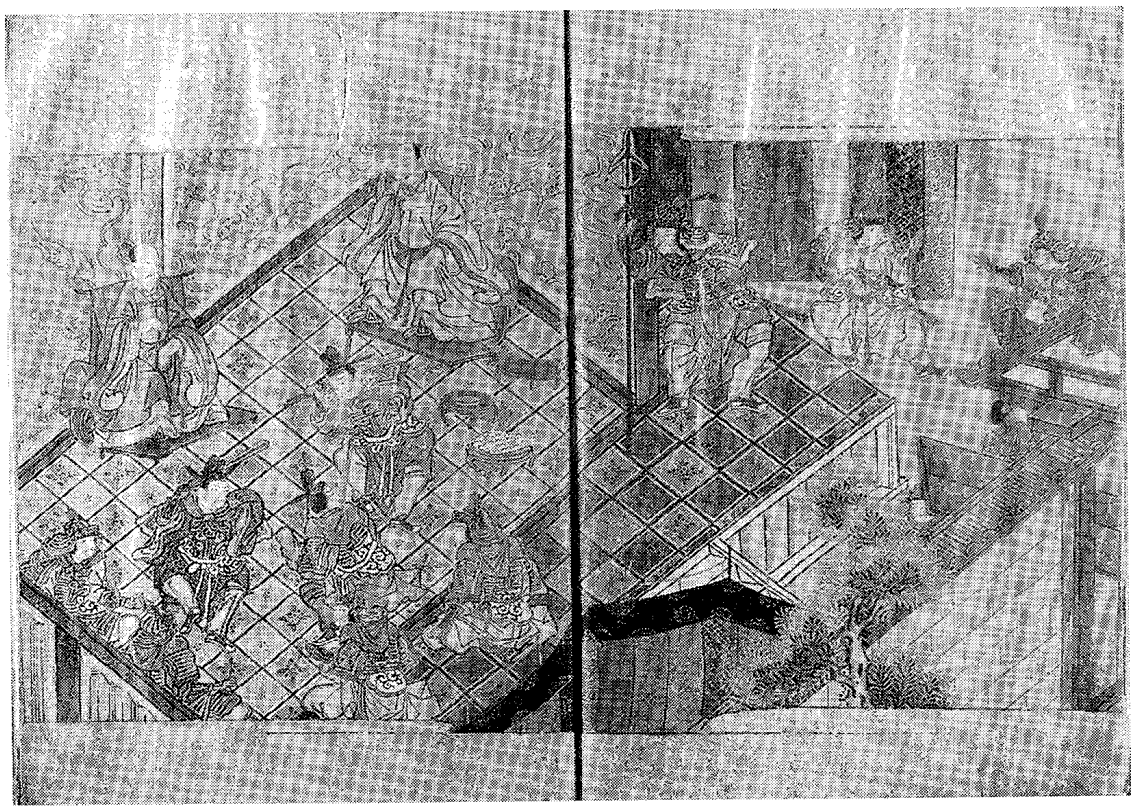


下②　項伯をもてなす沛公

上⑤　項羽と沛公の酒宴

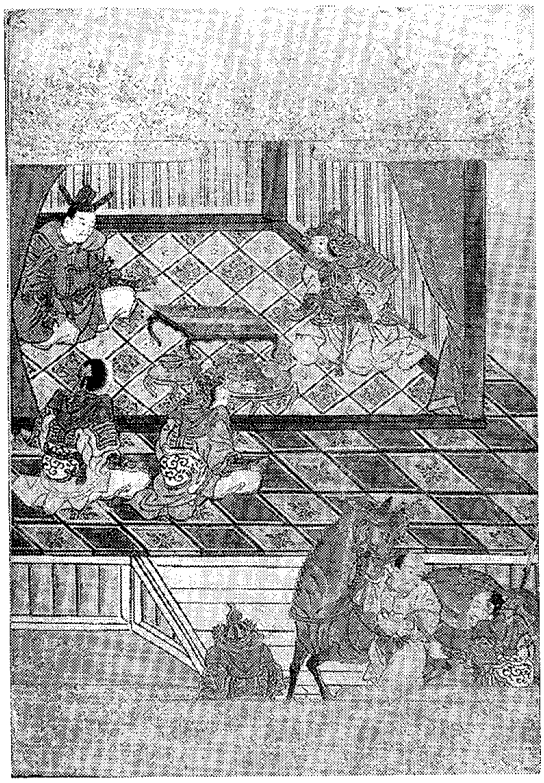


下①　咸陽宮に火をかける項羽軍



下③　鴻門の宴席で項羽をにらむ樊噲

下⑤　自らの首を斬ってさし上げる項羽



下④　項羽の使者を騙す張良